
今の私がある理由

へたれ向日葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今の私がある理由

【Nコード】

N9723G

【作者名】

へたれ向日葵

【あらすじ】

ここは日本の真ん中にある小さな村。そんなとてもものどかな場所
で起こる事件とは…東方をベースとして書かれる物語さて、一体誰
が主人公なのか…

0：プロローグ

小さい頃の記憶なんて覚えていない
私が誰に命を与えられたのか、それすらでもある
実に情けない話であるが、実際そうなのだから仕方が無い
これは、私が幼い頃の事を聞いた話

―それはそれは、朝霧が濃くて肌寒い朝の事だった
場所は村から離れた森

いつものように、朝早くから森に山菜を取りに出かけて行った
森は恵みの宝庫であり、生命の源と言っても過言ではない
背中には籠を背負い、しつとりと濡れた山道を歩いていく
髪の毛もしつとりと濡れ、何だか変な気分だった
そんな中、いつものように山菜を取ろうとした、その時だった
向こう側から声がした

それは、小さな子供が泣き喚く声

こんな場所で小さな子供がいるはずが無い…そう思った
第一、こんな大声出して泣いていたら、妖怪に食われてしまう
最近でも村の者が食われ、非常に妖怪は怖い
食われる前にいち早く助けるべく急いだ
こんなときは霧が鬱陶しいと改めて思った
そうして段々その声が大きくなり、そこで見つけたのは・・・

紛れも無く、女の子だった

小さい女の子で、黒く短い髪を持っていた
自分はその子を抱きしめて、つぶやいた
「もう大丈夫だから…」

その時少女…私は、泣き止み、彼の胸の中で静かに眠ったそうなの…

今の私がある理由 作：幻竜

序章 1：名前は、ない

今の私がある理由 序章 1：名前は、ない

森で泣いていた私は、とある老人に会い、彼に育てられている。眠りから目を覚まし、しばらくは彼と話すのを少し躊躇った。

そのせいか、彼は私を心配し、気を使ってくれていたのは小さい頃の私でも理解できた。

そんなある日のこと、彼は話しかけてきた。

コミュニケーションを取るには、自分のことを知ってもらうことが大事だとは、彼から何回も聞いていた。

彼の名前は陽翠^{ようすい}

「まあ、自分で適当に付けた名前なんだけどねえ」

そう言っていたのをまだ憶えている

で、その名前を聞いたと共に、私の名について問いかけてきた

「ところでお前さんの名前は何って言うんだい？」

不意に聞かれた私は、そういえばと思いついてみるも、出てこない

「…わからない」

すると、彼は優しく笑った

「なんだ、自分と同じかい。じゃあ名前を付けてあげないと…そうだねえ…」

いきなり名前を考え出したので、ときどきしたけど、何処か嬉しくもあった

「じゃあ、灯^{あかり}なんてどうだい？暖かい感じがしていいだろう？」

灯… 確かに暖かそうで、何だか心地よい響きだった

自然と頬が緩み、微笑んで私は頷いた

「気に入ったみたいだね。それじゃあ今日からお前さんは灯だ。これからよろしく頼むねえ？」

そう言つて優しく微笑む彼の顔は、とても私の心を落ち着かせた

「こちらこそお願いします、陽翠さん」

これが、ここで棲む事になった理由であった
小さい頃の私にとって、彼は心の支えだった

ここは日本という小さい島国

そしてここは、その国の真ん中に位置する一つの小さな村……らしい
私からしたらとてものかな場所で、自然に囲まれて素晴らしい
……というか、他の場所に足を運んだことがないため、他の場所と比
較することなんてできはしないのだが……

「おはよう、灯ちゃん。今日も可愛いねえ」

村の市場に買い物に出かけている最中、その声をかけられる

「そんなこと言って私に何か買わせようって言うのかしら？」

につこりと笑ってそう言う私に、商人は苦笑いを浮かべる

「灯ちゃんに隠し事はできないねえ。……まあ、でもどうだい？何か
買っていない？」

敷物の上に並べられた野菜は様々な形をしており、大きさも違う

私はその野菜を持っては戻し、比べたりして良し悪しを決める

「それじゃ、この大根とその白菜を一つ貰おうかしら？」

ぴったりの金額じゃなかった為、おつり頂戴ね？と忘れずに伝える

「はいよ、毎度あり！また買って行って頂戴」

そう言って、はいお釣り、と手のひらにお釣りを載せてくれた

その金額を確かめて……

「……あれ？これお釣りがおお……」

お釣りから目を離して商人の顔を見ると、片目を閉じて、口の前に
人差し指を立てていた

「ありがとうね」

私は手のひらにある少し多めの小銭を握って、また他のものを求め
て歩いていた

2：夕暮れどき

今の私がある理由 2：夕暮れどき

とある日、彼は妻と娘を家に休ませて、一人で買い物に出かけました
その日の夕暮は大変綺麗で、とても幻想的だったそうです

きつとこの景色をあの二人も見ているのだろうと思うと、自然に笑
っていたそう

今日は奮発して、お肉を買って、鍋にしよう

そう、心にきめて、弾ませて帰っていました

そうして、村から外れた家へと帰れば、そこには一人の妖怪がいた
そう

前まで生きていたその“もの”を喰らっていた

怖くて逃げた 助けを求めに村へと走った

無力の彼に、状況を打破することなんて出来はしなかった

だから、助けを求めにそこから逃げたのだった

無力な自分が嫌になり、彼は名前を捨て、新たな名前を名乗ったそ
う

その日の夕暮は、とても綺麗で、見ていて心が落ち着いた

なんだか胸が弾む そんな気持ちだった

スキップしながら家に帰り、適当に鼻歌を歌って帰る

そんなひとときが楽しくて、それでもって心地よかった

足取りが軽くて、なんだか空も飛べそう、そんな感覚

「ただ今帰りました」

私がそう言うと、奥から彼は出てきた

「おお、お帰り。ちよつと遅かったから心配したよ」

笑顔の中にどこか心配の色も見えた

「そんな心配そんな顔をしないでよ。私はちゃんと帰ってきたんだから」

「ん、ああ、ごめんね。表情にすぐ出てしまうみたいだからね」

「悪い癖…ですね。さてと、晩御飯の準備でもしましょうか？」

「ああ、そうしようかね」

そうして私と彼はともに準備をしていった

今、私の年齢は分からない 何しろ生まれた時の記憶すらないのだから

彼が言うに、見た目からするともう立派な女の子だという

見た目の年は17、18位だろうか…と言われた

拾われたのはもう10年も近くになるから、拾った7、8歳ころかな？と言っていた

別に私としては年齢などどうでもいい

ただ今を、彼と一緒に過ごすことができればいいと思っていた

私は、彼の話を聞くことが、とても好きだった

さてと、今日はどんな話を聞かせてくれるのだろうか…

そう想像しながら、私は晩御飯を作り、一緒に食べることにした

3：妖怪が生きる為

今の私がある理由 3：妖怪が生きる為

ある日私は夢を見た

妖怪に襲われて、殺されてしまう夢を

妖怪が跋扈しているこの世界で、そうなってしまふのは避けられないこと

いづどこであることなんてわからないし、当たり前なのかもしれないけど、その妖怪は私を殺す時に泣いていた

自分の空腹や楽しみのために殺すのなら、泣くはずなんてありえないのに

それなのにその妖怪は泣いていた

一体あの妖怪は…彼女は何を思っていたのだろうか
なぜ私を殺さなければならなかったのだろうか…

私にどこか似ているような身長で、輝く黄金の髪を持った女性の妖怪
涙を流してまで私を殺す理由…それが、わからなかった

彼に相談できるはずもないし、私はただ、ずっとそのことを心の中にしまい込んでいた…

食事も終わり、食器も片付けた私と彼は、縁際に座り、月を眺めていた

毎晩、こうやって月を眺め、彼の話を聞くのが楽しみだった

それは長い話ではないが、短くても蓄積されていくごとに知識も増えて楽しい

「ねえ、陽翠さん。今日は何の話を聞かせてくれるんですか？」

「そうだねえ…。今日も妖怪のお話をしてあげようか」

彼は、妖怪自体は嫌いなものの、それに関する話などについては詳

しく、とても興味深い

「ぜひお願いします」

私がそういうと、彼は笑って、語りだした

「自分が生まれるもつと前から、ここには妖怪が跋扈していた。そしてその妖怪たちはただ強さを求め、戦い、血を流していった。そうして、今生き残っている妖怪たちはその者たちの血を受け継ぐもの、あるいはまだ生き残っているものだよ」

「へえ…」

「しかしね、人間が生まれ、住むようになってきてから妖怪達は戦うこととともに人間を食べたり、遊びに使うようになってきた。そのため、自分の強さを求める者が減り、だんだん妖怪たちは衰えていった…」

「が？」 私は思わず問う

「最近になって、その妖怪達は強さを求める者たちが増え始めた。というのも、強い妖怪がまた動き出したからだ。だから、自分を守るべく、力を求める。故にまた妖怪たちは争い、しのぎを削り、生きる術を身につけるのだよ」

「っていうことは、妖怪たちも楽に生きることとはできないんですね…」

その話を聞いていると、私たちが食べられているのは、妖怪からしたら生きるために必要なことなのだろうと思った

私たち人間だって、植物を採り、生ける豚や牛、猪などの家畜を殺して食べている

それは、家畜からしたら人間は敵であり、食べられたくはないが、逃げることでできないどうしようもない世界なのである

それが、自分たちがその家畜側に回ったようなものである

生きるか死ぬか…そのために妖怪は手段として人間を食すことを選んだのだろう

なんだか、妖怪もかわいそうだなあ…と思った

「さてと…。それじゃあそろそろ寝ようか」

「そうですね…」
そうして私たちは眠ることにした

4：計画

今の私がある理由 4：計画

ある田舎の村に、娘がおりました

一人っ子で、それはそれは大切に育てられ、美少女へと育てて行きました

笑顔はやさしく、そして可愛らしく、村でも大切にされました

その娘は、人を喰うとされる妖怪のことが好きでした

妖怪に喰われることを恐れずに、見つけたら話しかけに行ったそう
な…

そんな少女も、時に妖怪のように強くなれたなら…と思ったことも
ありました

だけど、力を得てしまえばきつとこのような心もなくなってしまう
…そう考えたら、人間のままでいいと思ったそうだ

そんな彼女のことを、妖怪たちは好むものもいれば、嫌うものもありました

妖怪たる自分たちを舐めている、ふざけている、と…

そしてある妖怪は、ついに動き出したのです…

私は最近夢を見る

とある妖怪が私を殺す夢

毎回毎回同じ夢で、毎回毎回彼女は泣いていた
なぜ泣いているの？ そう問いかけたことがあった

その時、彼女はこう答えた

「また、同じ悲しみが巡ってきて、誰かを悲しめることになる。避けられない現実になるから、私は泣いているの」

そう答えて、私を殺したのだった…

朝を迎え、いつものようにして太陽が昇っていく

静かに揺れる木々に、草の上に乗る露は綺麗に輝いていた

「このような綺麗な場所だから…妖怪も寄ってくるのかな？」

そんなことを呟いて、私はうんと背伸びをした

実質、ここは他の場所より妖怪が多いそうだし、そう彼に聞いた

なんでも、この国の中心部に近く、しかも緑も生い茂り綺麗であることも意味があるらしい

（でもここに住む人間としたらちよつと迷惑かもなあ）

そう思つて頬を掻く

彼は妖怪が嫌いだが、私はそんなに嫌いではない

すべてがすべて悪い妖怪ではないと、そう考えているからである

「彼に言つたら考えが甘い！とか言われそうだな…」

なんだか頭の中にその風景が思い浮かび、苦笑いを浮かべた

とりあえず朝食を作つて、何をしようか考えよう、そう決めたため、行動に移つた

最近人間に力を貸してくれる妖怪もいたり、人間を楽しませたりする妖怪もいるようだ

これはまた彼から聞いた話なのだけど、気になる

だからちよつと人里へと足を伸ばしてみよう、そう計画してみる

一体どんなことに力を貸してくれたら、人間を楽しませるのだろうか…実に興味がある

何しろ、普段楽しいことなんてなかなかないし、少しでも騒ぎがあれば見に行きたいのが本性である

（かわいらしい妖怪なのかなあ？かっこいい妖怪なのかなあ？それとも…）

考え出すと止まらない どこまでも思考の回路が巡る

そんなことを考えているうちに味噌汁がぐつぐつと音をたてて煮えていたので、急いで火を止めた

この前は考え事をしてたら御飯が焦げてしまつて怒られた

味を確認するも、変な味ではなかったのほっと一安心
「さてと……起こしてこようかな」
そうして私は彼を起こしに行った

5：面白いこと

今の私がある理由 5：面白いこと

妖怪は、我慢が出来なかった

自分の地位を荒らされるにして進んでくる人間の女が

人が恐れる、力の強い妖怪のことを恐れもせず、平気で笑って話しかけてくる

ふざけてやがる そう思ったけど我慢してきたつもりだった

だけど、もう無理だった

だからあいつを殺そう、そう思ったのだった

男が消えてしばらくしてから、妖怪は何の躊躇いもなく家へと入っていく

そうして、邪魔をした女の母を殺し、そうして目標へとたどり着いたしかし、その女の瞳は恐怖ではなかったことに気がついた

どこか憐れむようで、まだ今なら引き返せると、そう伝えているような瞳

気に入らなくてたまらなくて、女を殺した

憎かった、憎かったのにどうして殺したら涙があふれてくるのかが分からなかった

その夜、その妖怪は違う妖怪に討滅された

その日は綺麗に晴れ、村の中も活気があふれていた

商人たちは大声で客を呼び寄せ、村人は井戸端会議を繰り広げる

そんな雰囲気が好きで、時々こうして用もなしに訪れる

だけど今回は、最近話題になっている人を楽しませる妖怪がいるかどうか、これが気になっていた

村の中を歩きながらも、賑わっている輪の一つ一つを確認するよう

にする

どこもかしこも商人たちがあふれ返っていた

(うーん…いないのかなあ…)

顎に手をやり、少し考えるようにしていると一人の女性が私の前に訪れる

「ほら、お嬢さん？そんなに考えこまないで楽しそうにしなさいな？」

その女性は、手のひらから水を吹き出し、そうしてふっと息を吹きかけると、それが凍ってしまった

それは綺麗な蝶の形をした氷となった

「ほら、これあげる。数年の間は解けないと思うから」

そう言っただけでそれを私に手渡した

「あら、広場に行っただけでしょう？」

そう言っただけで奥からくる女性の周りには、小さな人形が数体浮いていた

「ほら、お嬢さん。今から広場の方で楽しいことをやるから見に来なさいな？」

人形は私の手を引き、歩くようにと促すようだった

きっと彼女たちが、私たちを楽しませてくれる妖怪たちなんだろう
広場へと移動すると、たくさんの人たちが集まり、その妖怪たちの芸を見ていた

大量の水がとめどなくあふれ、まるで大きな蛇のように形をかえ、
空で蠢いている姿は圧巻だった

小さな子どもたちに、私にくれたような数年間解けない氷を渡していた

人形を使っていた妖怪は、かわいらしい劇を見せてくれた

これには子供は興味を大いに示し、大人も思わずほおを緩めた

「またこちらに来させていただくかもしれませんので」

そう言っただけで広場から出ると、次は商人のところへ行き、食べ物を買っていた

こうして妖怪も普通のものも食べるということをついに分かって、恐怖

心を和らげようとしているのかもしれない
そう思うと、ますます妖怪が好きになった

「今日は面白いものが見れたなあ」

思い出すたびに心が躍っているのがわかった
そんな踊るような心で、家へと帰って行った

6：心の中

今の私がいる理由 6：心の中

この世界は不思議だった

何も感じず、そして何の音もない世界に私はいつの間にか存在していた

私は、どこにいる？そう思うと、その問いにどこからか答えが降りかかってきた

「あなたは下へと行きなさい。まだここにいるべき者じゃない」
気づけば私はそこにいた

自分と同じ人間が住む、自分の知っている世界へと戻ってきたのだ
自分と同じ人間が、自分とおな・・・じ？

走ろうとした だけど足が軽く、地面を踏んでいる感覚がない
浮いてる・・・ どうみても浮いていた

髪の毛だって、黒い髪の毛も、金髪になっているし、服装だってい
つの間にか変わってる

何で？さっきまで部屋で・・・

そこで私は思い出した 妖怪に殺されてしまったこと
そして理解した 私が妖怪になったことを・・・

その日は家に帰ると、彼に聞かれた

「なんだか気分がいいみたいだね。いいことでもあったのかい？」

「ええ、ちよつと気になっていたものが見れたので嬉しいの」

心が躍るような思いだった

「どういうことか教えてくれないかね？」

「まあ、ご飯を作って、それが終わったらにしましょうね」

そう、私は笑顔で言うと、早速夕食の準備を進めた

夕飯も終わり、いつものように私と彼が隣り合って月を眺める時々、話すのが逆になる時があるが、それが今日のような

「今日はね、最近噂であつただけ、人間を楽しませるのが好きな妖怪たちが村に来るっていうから行ってきたんだけどね…」

普通の妖怪の話をするとか訝な顔をするが、害のない妖怪を咎めることはしない彼は頷いていた

「水を使って、凍らせることができる妖怪と、人形を操る妖怪でね、いろんなことをやって見せていたんだけど、どれもすごく面白かったわ」

「それは楽しそうだねえ」

そう言つてほほ笑む彼

「それで、数年の間は解けることがないって言われて、氷でできた蝶をもらったの」

私はもらった氷の蝶を彼に手渡すと、驚いた表情を見せた

「これはすごいね。いいものをもらったね」

それに私は笑顔でうなずいて返した

「それに、そのあとに商人から食べ物を買っていたの。妖怪にもいい妖怪がいるんだね」

「ああ、戦いを好まない妖怪だっているさ。だけどね、森の中に帰ればそれらは本当の妖怪の姿に戻る。だから、人里にきてそうして分はいいが、森の中に戻って、また戦いを続ける妖怪たちは嫌いだ。そいつらは善なんてない、悪なんだよ。それだけは覚えておきなさい」

彼の言葉には、それでも心の中では妖怪を嫌っているということが滲み出ていた…

7：思い出

今の私がある理由 7：思い出

時々思う 私はなぜあの森で泣いていたのかと言うことを

一度、一人で森の中を歩いて考えたときがあった

木にもたれかかって、木陰の入って、ずっと、ずっと考えた

記憶の片隅、何かが引っかかっていて、とれることはなかった

そうやってずっと考えているうちに、いつの間にか寝てしまっていた
そうして夢を見た

なんだろう、自然の中で私と一緒に家族のような人がいた

優しい笑顔で私にほほえみかけ、それを見て私も自然にほほえんでいた

私の名前を呼んでいた だけどそれは微かにしか聞こえなかった

聞き返すことができなかった 口が重くて開かない

自分の思いを伝えなかった

自分の思いを叫びたかった

私の名前は・・・私は一体何なの！？

そう叫ぼうとしたそのときには、私は現実をみていた

太陽が傾きかけ、少し寒い風が頬をなでていた

私はなぜ、彼が妖怪を嫌いなのかがわからなかった

問いかけようと思ったことは何度かあったが、それは思いとどまる
ばかりだった

（なんか・・・きっと彼のトラウマか何かがあるんだろうなあ）

そう予測すると、何もすることができなかった

聞かれて嫌なことを人は一つは持っているはず・・・そう思っていた
自分には過去がない

だから過去について聞かれるとなんだか胸が苦しくなる

きつとそんなことがみんな一つは持っているはずだと感じたから・

そんなことを考えながらも、彼の部屋を掃除を進める

そうしている中で見つけたものを、私はまじまじと見つめた

若い夫婦と、一人のかわいらしい黒髪の女の子

「これ・・・陽翠さんだよね？つていうことはこれ・・・」

どう見ても夫婦　そして、その子供だった

「私の妻と娘だよ。もういないんだけどね」

後ろを振り向けば、伸ばしたひげをさわりながら、彼は部屋に入ってきた

「妖怪に襲われて、殺された。私は何もすることができずに、村に助けを求めたんだ。そう、今あることを拒否するかのようにして逃げたんだよ」

突然として語られたその真実に私は戸惑うとともに、何となく予想をしていたことと当たっていることに驚いた

「だから妖怪が嫌いになった。私は妖怪のことを娘によく話した。だから彼女も妖怪が好きだったんだよ。今のお前みたいだね。だけど、その娘を気に入らなかった妖怪に殺されたようだった。それがとても辛くて、たまらなかったんだ」

「・・・」

きつと彼は、私と彼女を照らし合わせていたのだろうか、と思った自分のせいで、自分のせいで娘が、と語る彼に、私は声をかけた

「陽翠のせいじゃないです。それに、娘さんが自分で妖怪を好きになった。少しの間でも、その好きな妖怪と過ごすことができた。陽翠は娘さんに楽しみを与えることができた。それだけでも十分じゃありませんか」

「・・・そうかのお」

そういうと、彼は身を翻して部屋から出て行った

頬に、一筋の涙を流して

8：冒険へと

今の私がある理由 8：冒険へと

私をみるだけで逃げました

妖怪になった私をみて、ただ仲良くしたかっただけでも逃げました里には、私みたいに妖怪が好きな人間がいないようです

私は毎晩泣きました

森の中で、一人でずっと泣きました

私をみたほかの妖怪は、変なやつだと寄りつきませんでした人間にも、妖怪にも私は受け入れられず、ずっと一人でいました逃げないで？そういつても私の言葉に耳すら貸してくれないお願いだから・・・私と一緒に・・・

その願いは届くことなく、人間はしつこいと叫び逃げ続けるだから私はいつものように、森の中で一人で泣いたそんなある日、一人の少女が現れた

彼女は優しく頭をなでて、何で泣いてるの？

そう、私に問いかけた

私をおそれず、声をかけてくれた彼女に、私は初めて笑顔を見せた嬉しかったから 初めて話ができたから

笑顔のままに、私はまた泣いた

泣いてばかりだったけど、今回ばかりは本当に止まらなかった…

動物からしたら人間は怖いし、人間からしたら妖怪は怖い

じゃあ、妖怪が怖いものって何だろう？って思った

やっぱり強い妖怪は怖いのかなあ…とか考えてみたり

そんな、答えの分からぬものをずっと考えているのも暇だったので、外の空気でも吸ってみようかなあと思った

たまには森の中を歩いてみたい

まだ見ぬ場所は興味が沸くし、冒険してみたいっていう野望みたいなものが沸いてくる

我ながらにして男っぽい感じだなあと思ってたんですけど笑ってしまった
「さてと…それじゃあ冒険の始まり、かしら？」

そんなことを一人呟きながら、森の中へと一歩踏み出していく
木々の緑が生い茂り、そよぐ風と共に葉達はざわめき、森が揺れる
その風は私の髪を揺らし、それと共に妙な心地よさを与えてくれる
鳥のさえずりは透きとおるようにして鳴り響いていた

「綺麗な声…。落ち着くなあ…」

こんな場所で私は一人で泣いていたのかと思うと、不思議な気分が
してたまらなかった

木陰で眠って、その時に見た夢のことを思い出していた

（あの人は誰だったんだろう…。結局、あれから1回もあんな夢見てないなあ）

優しい笑顔で笑って、私と手をつないでいたあの女性…

「まあ、考えたって夢の世界が現実になるはずなんてないし…今は忘れよう」と

そんな風に投げ飛ばして、口笛を吹いて森の中を進んでいった
あんまり深入りはしないように。だけど、今まで行ったことがない
ような場所へ

私は一歩ずつ、確実に踏みしめていった…

序章 完

8：冒険へと（後書き）

序章はこれで完結です

次回から中章へと入っていきます

中章 9：不思議な気持ち（前書き）

ここから中章がスタートです

中章 9：不思議な気持ち

今の私がある理由 中章 9：不思議な気持ち

昔、森に人間は住んでおらず、妖怪たちだけが跋扈していたという信じられるのは、己の力のみの世界が広がっていた
出会っては争い、そして弱者、敗者は勝者に喰われる
大量の妖気がそこを囲い、普通の人間なんて立ち寄ることができない

それほどにまで濃くて、強力な妖気を裂いて割った人間がいた
奇妙な奇術師、幻術使い、奇抜な剣士、そして、結界師
部外者たる人間が入ってきたことを知った妖怪たちはそれを狩るべく戦いを挑んだ

されど、結果は返り討ち

奇術師は、正体のわからぬ術と攻撃で相手を惑わせる

幻術使いは、文字の通り幻術を使い、体と精神ともに壊していく

剣士は、人間離れた速さと剣術で敵を斬り裂く

そして、結界師は人間の身体能力を超越したものであり、強力な霊力で妖怪を圧倒した

その結果、そこに人間が住みつき、集落が生まれたという…

今もなお、その者たちの血を受け継ぐものが生きているという…

夜にでもなれば、この森も妖怪たちの時間となり、闘っているのだろう

ただ今今は太陽が高く昇っていて、眩しいほど輝いている

そんな時はなかなか襲われないと、私は考えていた

夜になって怖いのは、夜雀の歌声である

一度彼の話の中で夜雀の話を聞いたときがある

なんでも、彼が襲われたけど生還した唯一の人に聞いて得た情報だ
そうだ

夜道をずっと歩いていると、どこからともなく音がする

だけどそれはだんだんはつきりと聞こえてきて、それが音じゃなく
て声だということが分かったそうだ

その歌声は、とても美しく、言葉で上手く表せないほど素晴らしか
ったそうだ

すると、自然と足がその声の方へと勝手に動いていき、もっと聞き
たいという感情に脳が支配されていく

やがて暗い闇が自身を覆い、その時にやっと夜雀だということに気
づいたらしい

喰われたと思ったけど、歌いだしたときからその夜雀を狩ろうとし
ていた妖怪がいたらしく、助かったそうだ

視界が戻った頃には、そこにはひとつの羽が落ちていただけだった
らしい

（すっごい偶然だよなあ、その人。本当についてるなあ……）

そんなことを聞いたときには思っていたが、今は

（1回夜雀の歌声聞いてみたいなあ……）

これである

まったくもって危機感がないなあ、と自分でも思っけど、本当にそ
う思ってしまうんだから仕方がない

とりあえず夜雀に襲われることはないだろう、となんか安心してし
まった

「ちよつと歩き疲れたかなあ」

そうやって一人でつぶやいて、木陰に座って一休み

涼しくて、風が心地よくて……

時の流れが、なんだか止まっているようで、それでも必死に動いて
いるようで……

なんだか不思議な気持ちになっていた

10：迫りくる者

今の私がある理由 10：迫りくる者

小さな少女は、いつものように、私の所に来て話をしてくれた。いつも優しく、そして楽しく私と話してくれて、嬉しくて、嬉しくて…

だけれどそれは、たったひとりの少女だけで、それ以外はいつもと変わらない。

私を見ただけで恐れ、咎め、いつものように一人で悲しむ。

そんな時の少女の優しさは、とても心の奥まで響いていった。

しかし、日が経つにつれて、なかなか彼女が来なくなった。

それは、彼女が親にばれたらしく、外出するなど言われたかららしい。

それでも来てくれる少女は、なんと心が優しいのだろうと思った。

しかし、そんな心の中に、何か心に黒いものが芽生え始めた。

もしかしたら、少女は私を使って遊んでいるのかもしれない、そう思い始めたのだ。

少女の笑みが憎い 平気でへらへらと笑っている少女がイライラする。

なぜそこまで笑えるのか 何がそうおかしいのか。

腹立たしくてたまらない、この笑顔はどこから湧いてくる。

だから…だから私は…。

突然と言ってもいいほど、風が吹きやんだ。

森の中特有のざわめきは音を失い、無音の世界、死後の世界のようにだ。

まだ死んだことはないが、なんとなく、そのような感じだろうと予測した。

風が冷たい…いつもよりも冷たく感じる。

まだ太陽は高いし、夕方というには早すぎる時間帯だった。

おかしい 何でここまで変な感覚に襲われなきゃいけないのだろうか。

ここに居ては危ない そう、本能が告げていた。

私は急いで立ち上がり、いやな雰囲気から逃れるために走る。

急いで、急いで…体力なんて関係ない、ただ、走った。

だけど、そんな何かわからない危機に襲われながらも平然と止まってしまう足を恨んだ。

私を寒気が襲い、恐る恐る背後を覗いてみると、そこにそれはいた。

「こんにちは、どこかのだれかさん。あなた、凄く…」

私は、急いでその妖怪に背を向けると、一生懸命走った。

「美味しそうね！」

怖い 怖い 怖い いや、来ないで！！

叫びたくても叫べない そんなことだった。

妖怪は好きだ だけど、生まれて初めてこれほどまでの恐怖を味わった。

怖い、妖怪が怖い 殺されてしまうかもしれない。

走った 一生懸命走って、走って、走って！！

助けを呼んでも、絶対に助けが来るはずがないという絶望感。

そして、足を止めれば殺されるという恐怖感が襲ってくる。

吐き気を催しそうなくらい、胸が閉まりそうで、辛くて、怖くて…

そんな時に、びっしりと地に這う木の根に足を引っ掛け、こけてしまった。

足が痛くて、血が出ている 痛くて、痛くて立つのが辛かった。

いや、お願い、立って！！ そう願っても足で立つことができない。筋肉は凍り付いたかのように固まっていて、起きあがらせることをさせない。

迫りくる妖怪から逃れることが出来なかった…。

11：本当の自分？

今の私がある理由 11：本当の自分？

気づけば顔も腕も、至る所が朱に染まっていた。
なぜそのような状況なのかはわかっている。

目の前で少女だったものは、今はもう少女として形を保っていないかった。

私はそのものを喰らった 狂ったように。

泣いていた 泣いていたけど、もう戻れないから。

戻れないから私はそれを喰らって、なかったことにしたかった。
だけど、もう頭の中が渦巻いて、少女の両親も喰い殺した。

血塗られた私の顔を見て、人間は逃げまどい、叫び声を上げていた。
そうして森の中で私はいつものように一人で座っていた。

隣にもう一人の妖怪が座り、私に笑顔でいった。

「やるじゃねえか新入り。」

私はそいつを睨むと、そいつは苦笑いを浮かべながら肩をたたいた。

「そんな顔するなよ。晴れて妖怪としての幕を開けた訳だ。」

次の時、隣の者は血しぶきを上げて倒れていた・・・

動かない。

動きたいけど足が動かない。

冷や汗が背中から吹き出るのがはつきりとわかった。

妖怪の影が私にまで降りてくるのをみて、絶望した。
もう逃げられない。

妖怪がこんなに怖い者だなんて知らなかった。

改めて知った妖怪の恐怖 だけどそれは遅すぎた。

「お疲れ様。 ひと思いに楽にさせてあげるからね。」

そういつて不気味に笑う妖怪を、私は直視することができなかった。終わる 私は食われて死んでしまうんだ。

「あらあ、雑魚妖怪風情が人間襲つていい気分になつてゐるわねえ。」
え？ 声にはでないが、心の中でそう言った。

振り向けば、山の新緑にも劣らぬ緑の長い髪を持つ女性がいた。

人間の女性なんかじゃない 雰囲気からしてわかる。

妖怪だ しかも凄まじい力を持っていると予測できる。

「な、何？私の獲物を取ろうつていうの？」

「人間なんか狩つてもおもしろくもおかしくもないわ。標的はあんたじゃないでしょう？」

そう言つて日傘を地面へと思ひ切り突き刺すと、植物がたくさん現れ、妖怪の四肢を裂いた。

まさに瞬殺 あつという間の出来事とはまさにこのことだろう。

緑髪の妖怪はそれを喰らうと、血でぬれた顔のままでこちらへとよつてきた。

「ひっ」

「そんなに驚かなくてもいいじゃない。食べる訳じゃないんだから。ただ・・・」

私の髪を優しく撫でて、彼女は言い放った。

「・・・可哀想に。あなたはまだ事実を知らない。目覚めていない、本当のあなたに。もしあなたが目覚めたのなら、またあなたに会いに行くわ。」

私は何のことだかわからず、ただただ見つめていた。

だけど、あの人が私を救ってくれたと思い、いい妖怪もやっぱりいるんだと、そう思った。

12：止まらない興奮

今の私がある理由 12：止まらない興奮

私は一人で、ずっとずっと歩き回っていた。

心の中は空っぽで、何をしても満たされない大きな器。

入れても入れても、大きな穴から吹き出てしまつて、いたずらに器を埋めているだけ。

出会つたら、声をすらかけずして殺した。

有無も言わず、手加減なんて無しで、跡形もないように壊して。力を求める訳ではなく、ただ目の前の敵を排除して、殺して、生きてきた。

そんなある日、オレンジにも似た髪と角を持つ女性が現れた。

何事もなく、いつものように、私はそいつを削除した・・・つもりだった。

死ぬことはなく、今まで私がやってきたようなことをそいつは平然と私にやって見せた。

ぼろぼろにやられた私を見て、そいつは笑った。

「無様だねえ。人を殺して、自分を見失つて。ずっと見ていたけど、ずっと滑稽な姿のまま。ほんと、そろそろ自覚したらどうだい？」
聞きたくなかった。

次に来るだろう、その言葉を聞きたくなかったから、耳をふさいだ。けど、そんなものも無視して、完全に聞こえてきた。

「妖怪を受け入れる。いつまで人間を殺したことを悔やむ？今のおまえは妖怪でも人間でもないただの抜け殻だ。」

私はそのまま急いで家へと帰った。

寄り道などせず、まっすぐ、まっすぐに家へと帰った。

途中で妖怪にあつたとしても、そのときは何か怖くなかつたのかも
しれない。

そうして家に帰ると、彼は急いで帰ってきたことと、足から血を流
していたことに驚いていた。

「いったい何があつたんだい？」

驚く彼に、私は冷静なようで、興奮しながら言つた。

「妖怪に襲われたの！すつごい怖かつた。」

「けどその声は、私でもわかるほど明るくて元気だつた。」

「なんだつて！？おまえは森の中に行つたのか！？」

その声は驚きよりも、怒りの声の方が強かつた。

きつと、小さい頃から言い聞かせていたにも関わらず、それを破つ
てしまつたからだろう。

「大丈夫か？怪我は痛まないか？」

「足はまだちよつと痛いけど、大丈夫だよ。」

平然と言つ私を見て、少し安心した顔を見せていた。

「何故森に行こうとしたんだ。あれほど私は言つてはだめだで行つ
たじゃないか。」

今度は、怒りの中に何か悔しさのような、やるせなさのようなもの
を感じた。

「何故だかわからない。だけど、何か森に行きたかつた。もしかし
たら何かか呼んでいたのかもしれない。」

本当に、何か心の中が何かうずくようで、それでもつて何かに掴ま
れ、引つ張られるようなそんな感覚が襲つていたのだ。

私は、そんな変な感覚の中で、もしかしたら正気を失っていたのか
もしれない。

だけれど、今となつてはそんなものはどうでもよくて、興奮が止ま
なかつた。

13：言い合い

今の私がある理由 13：言い合い

現実を、今ある本当の自分をやっとみたような気がする。

今までは自分さえもが朧で、歪んだ水面の中に映っているようだった。

ただあの妖怪に会って、やっとのことで視界がクリアになった。

自分は妖怪。 紛れもない妖怪。

現実を受け止め、すべてを受け入れることが今の私には必要だと思った。

拒否しようともできない事実。

それはどの妖怪も一緒に、どの種族にも共通するものごと。

私は、私の住んでいた場所へと戻ることを決意した。

それは私へのけじめであり、私の強さを、私の立場を確かめるためでもあった。

力を求め、妖怪の中でも強みを求めた。

帰ってきた里は、襲う気配のない妖怪を受け入れる里へと変わっていた。

なんだか空しい気分になったけど、受け入れなければまた逃げることになる。

一歩踏み出して、懐かしい場所に帰ってこよう。

私が人として生きた、この里で・・・。

「それはそうと・・・妖怪にあつてよく生きて帰れたな。」

そういえば・・・と、いうような表情を彼は私に向けた。

私も、それに似た表情をきつと浮かべていただろう。

「私ね、妖怪に襲われて本当に死ぬかと思ったの！でもね、違う妖

怪が私を助けてくれたの!!」

彼も、きつと妖怪を見直してくれる、そう思つて彼に言つた、が・

「それは助けたんじゃないだろう! 妖怪がいたからそれを排除しただけで、おまえを助けることが目的なんかじゃないことは、違ふ人の話で言つたはずだ!」

予想とは違ふ、いきなりの怒号に私はただただ啞然とし、驚いた。

「何で? だつて、そんなこと一言も私に言わなかつ・・・」

「私の話を聞いていなかったのか!? 妖怪は自分の思うままに生き、人間なんてどうでもよいと言つたはず。なのになぜわからないんだ。」

何で怒られるかわからない。

だんだん私も、怒りの感情が溜まつてくる。

「わかつてるよ。だけど、全部が全部そうとは限らないでしょう? 全てを敵視することこそ間違つてるわ!」

「私の娘もそう言つて死んでいったんだよ!! お前もそれと同じ道を通つていくというのか?」

その言葉を聞いた瞬間、なんだか心がすごく痛くなった。

だけど、それと同時に私を彼の娘と被せる発言がどこか癢に障つた。

「何で私をあなたの娘さんと被せるの? 私は私。同じ道を歩むとは限らないでしょう? なのに何ですぐ娘さんと被せるの? 一緒にしないでよ・・・馬鹿にしないでよ!!」

そついうと、何も言い返せないのか、下を向いたままだった。

「馬鹿にしないでよ・・・!!」

私は、踵を返すと、家の外へと出て行つた。

14：旅立ち

今の私がある理由 14：旅立ち

私が特に思い入れのある場所がある。

それは、私が生きていた場所、前に生きていた家そのものだった。人間に騒がれるのが嫌なので、静かに、ばれないようにその家へと近づいた。

なぜか暮らしていた町並みが懐かしい。

前までずっとここで暮らしていたのに、そんなに時間が経っていないのに。

それがひどく愛おしく、懐かしく感じたのはなぜだろうか。

それは、私が今まで自分を見失っていたからだだろう。

何か懐かしい香りがするのは、村特有の香り。

私はその場所へと行くと、そこには前と同じように、何も変わらない家があった。

今彼は一人でいるのだろうか？そう思っただけで覗いてみる。

そこには以前とは変わって、年をとった彼がいた。

そして、それとは別の、可愛らしく笑う女の姿があった。

私はその姿に驚くも、微笑み、そして妬んだ。

私と変わっているその女を。

何も知らない女が平然として彼と一緒にいることを。

だからその日、あることをいつか決行しようと決めた。

「絶対に……絶対に……」

彼の声が、待っておくれという声が、だんだん遠ざかっていく。遠ざかっていくのは、私の足が彼とは逆の方向へと動いているため。彼から逃げ、私と死んだ娘さんを重ね合わせるような彼の発言から

逃げた。

なぜこれほどまでして逃げる必要があるのだろうか。

私自身も分からなかったけど、何か心が痛くて、辛くてたまらなかったから。

流れる涙が止まらなかったから。

だから…彼の言葉も遮って、逃げだしたのだろう。

また森の中へ、現実から逃げられる場所へと走って、走って…

だんだん太陽も傾き始め、妖怪たちの時間が訪れようとしている。

だけど、今の私にそんなことは全く関係ないように思えた。

声を殺して泣いていたけど、だんだん堪えられなくなって、大声で泣いた。

誰かに襲われてもいい。

だから今は、大きな声で、悲しみを消し飛ばすようにして泣いた。

辛い過去をまた味わいたくないから…その気持ちは凄く分かる。

だけど、いつまでも過去に縛られていては、楽しむことなんてできない。

縛られてばかりの人生に、何か楽しいものなんてあるのだろうか？

命が有限であるから、人生が楽しく感じるものだ。

だけど、その命の時間の縛りと共に、たくさんの物事に縛られていたら何もできやしない。

そんな世の中なら私はきつと逃げ出すだろう。

「…どうして分かってくれないのかなあ…」

そう呟く声も、どこか空しく消えていくような気がした…。

中章 完

終章 15：今の私がある理由

今の私がある理由 終章 15：今の私がある理由

今しかない…こんなチャンスは今しかない…

ここでやらなかったらいつやるといつのだろうか。

私は、口を大きく開けて笑い、目標へと向かっていった。

音も立てずに、そっと、そっと。

だけど進む歩幅は大きく、確実に。

「待っていてね…、…さん」

泣き止んで一息つくと、冷めた頭で様々な思考を繰り広げた。

私を、私自身を一人の人間として認めてほしかった。

結局私は、亡くなった娘さんの身代わり程度しかなかったのだろうか。

そう思うと、胸が苦しくて、辛くてたまらなかった。

私は彼にとって何なのだろうかと自分に問いかけてみる。

…見当たらなかった。

私が彼の元にいる理由は、単に拾って、放って置けなかったから、ただそれだけだという理由しか思い浮かばなかった。

これほど消えてしまいたいと思ったことはなかった。

そして、忘れ去ってしまいたいと思った。

それでも、彼の笑顔が、彼の言葉がこういう時に限って頭の中に蘇ってくる。

いつ、どんな時でも優しくしてくれた彼

たとえ、それが娘さんの身代わりの為だとしても、嬉しかった。

きっと彼だって途中から気付いていたのだろう。

私を娘さんの身代わりにしたとしても、それは空しいだけだという

ことに。

だけど、今更態度を変えるわけにも出来ないし、きっと私のことがもう離せなくなっていたのだろう。

彼は…本当に優しくて、お人好しで…

「忘れられるはずないじゃない…!!」

次第に考えることすら辛くなって、一人でまた俯いて、呻いた。嗚咽を殺すように、ぎゅっと顔を服の裾に押しつける。

服の裾が涙で濡れてしっとりとしている。

そこにまた涙を重ねていった。

私の彼を恨むような思いも、一緒に溶け込んでいくようだった。

16：悪いところ

今の私がある理由 16：悪いところ

今ここで助けても、きっと彼女は変わってしまうだろう。

私にはわかった。

雰囲気というか、何か言葉で言い表せないものを私は感じた。

今助けても、助けなくてもきっと散るだろうとされる運命を決めるのは私しかないだろう。

他の妖怪は普通の人間なんか興味がない、あるいは食料程度にしか思っていないだろう。

まあ、一部の妖怪は人間を好きだから助けようとする妖怪はいるが・・・。

現時点では彼女のことはみていない。

だから、私しかその運命を握っていないといっても過言ではなかった。

見捨てるわけにはいかない、私はそう考えている。

人間は弱い。

しかし、そんな人間でも妖怪に持っていないものがある故、憧れのような感情もあるし、放っておけないという感情もある。

だから、泣き叫んでいる彼女の元へ、ゆっくりと歩いていく。

あの子の運命を、見つめるために・・・

あの子の未来を、見つめるために・・・

だんだん日が落ちていく。

辺りは輝かしい黄金色に満ち、少し肌寒くなってきた。

涙はすっかり乾いて、引きつるような感覚を頬に覚えた。

このまま帰ろうか、それともこのままいようか迷った。

いつそのままここで死んでしまっても構わないとも思っていた。
泣いた後のすっきりとした感覚が、そう思わせていたのかもしれない。

そう思っている中、甘い香りが私の鼻孔を撫でる。

ふつと後ろを振り向くと、あのとき助けてくれた緑髪の妖怪がそこにいた。

「こんにちは、お嬢さん。」

「こ、こんにちは。」

あまりにも淑女的な態度の妖怪だったので、少し驚くも挨拶を返す。
「彼と喧嘩したみたいね。いいの？一人にしておいて。きつと寂しいと思うし、反省してると思うわよ？」

なぜ彼女は私のことを、さっき起きたことを知っているのだろうか
と疑問に思った。

しかし、彼女のいうことは的確で、私は急に彼のことが心配になってきた。

「いつまでも自分から逃げてちゃだめ。自分も悪いところがあるでしょう？考えてみなさいな。」

小さい頃から、彼にずっと教えられていたこと。

妖怪は優しい面もあるが、人間の隣を歩いているわけではないという
こと。

妖怪は食べるものに困れば人間を食べるのを躊躇わないこと。

彼に教えられたことの全てが、頭の中に蘇ってきた。

いつかはそうなるとはわかっていても、その法則を壊してやりたい
と思っていた。

だけどそれを壊す力もない私は、ただそれを祈るばかりだった。

「私にも・・・悪いところがあるのに、全部彼のせいにしてた。早く謝りに行かなくちゃ。」

心からそう思った。

17：守られる者

今の私がある理由 17：守られる者

どこかで私を呼んでいる・・・。

暗い闇の中で、私の名前を呼んでいるのがわかった。

ずっとずっと寝ていたから、初めて知った私自身の名前。

一体どこで誰が私の名前を呼んでいるのだろうか。

私は少し思案して、上の方を仰ぎ見てみた。

自分は、大きな壺のような場所に閉じこめられていたのだろう。

歩いて、壁の方までいってみれば、冷たく、堅いものが私の手に触れた。

いつから閉じこめられていたのかなんて知らない。

だけど、その上にある小さな光に、届け届けと手を伸ばしてみる。

届くはずなんて絶対にはいはずなのに・・・。

それなのに何か届くような、そんな錯覚を覚える。

自分の背中に翼があるのなら、簡単に飛んでいけるのに。

だけど、私にそんな翼はないから。

だから、だから・・・

「それでいいの。早く家に帰ってやりなさい。」

緑の髪の女性は優しく私にそういうと、につこりと笑って見せた。

それは、妖怪とは思えないほどに人間らしい笑みだった。

「それが今あなたにできること。あなたも反省したのなら、彼とお相子ってことになるから、ね。」

その言葉が、私の背中を押してくれた。

「ありがとう、妖怪さん。私、彼の場所に戻ります。」

「あらあら、私の名前は妖怪さんじゃなくってよ？私の名前はね・・・

・
」

私は彼女の名前を聞いて、名前を呼び、感謝の言葉を残した。

そうして彼女に背を向けて、私は辿ってきた道を帰っていった。

早く彼に会って、謝りたかった。

私は感情に身を預けて、彼を否定し続けていたから。

彼の教えなんか全部無視して、私の考えだけで話をしていたから。

だから、夜の近づく山道を、一人で走って帰っていった。

「おい、久々の人間じゃねえか。こりゃご馳走だぜ？」

「お、若い女か。こりゃ上手そうだ。」

そいつたちは、その女が一人で走っているのを見て笑みを浮かべていた。

酒を煽る私に、そいつはおまえもどうだと誘ってきた。

「やめときな。おまえさんたちはまだ死にたくないだろう？変に手を出さない方がいい。」

そう言い残して、私はその場を去った。

なんだあいつ、と呟きながらも未だあの女の子としか話していない妖怪たち。

次の瞬間に、小さな断末魔とともに二つの妖気が散っていくのがわかった。

「あゝあ、言わんこつちやない・・・」

私はまた酒を煽り、はあ、とため息を一つつく。

また、まだ太陽の昇る上空を、黒い雲にも似たようなものが覆っているのが見えた。

「おや、蟲の王様もおいでかい？これから起こるのはよっぽど大事なんだねえ・・・」

私は木に寄りかかったまま、そう呟いた。

「・・・おいおい、何かの冗談か？あんな女の子の為にあの三人を敵にしたくなんかないぜ？」

その少女には、緑髪の妖怪と、角の生えた鬼、蟲の王がついていたことに、大体の妖怪たちが気付いていた。

18：早く帰りたい

今の私がある理由 18：早く帰りたい

手を伸ばしていた、そんなときに私へと声が降りかかってきた。

聞き覚えはないけど、どこか優しい声であって、なぜか緊張してしまふ声。

背中に汗が伝い、壺の中にも関わらず、冷たい風が吹いたような感じがする。

思わず私は身震いをしたが、その声を聞く。

「あなたをここから出してあげるわ。」

その第一声に、私は驚き、そして思わず喜んだ。

それはそうだ。

こんな漆黒の中にずっといられたら溜まったもんじゃないし……。

「だけどね、一つ約束があるの。」

「約束？何かしら？」

その約束が気になっていたので、私は問いかけることにした。

「好奇心旺盛ね。まあ、教えなきゃ約束じゃないしね。」

そうやって、何か悪戯っぽく笑う声が聞こえた。

「焦らさないで教えなさいよ。」

「はいはい、じゃあ言うわ。えっとね？」

そこで、また、吹いているはずのない風が強く吹いた。

何か、妖怪の叫び声のようなものが聞こえて少し足を止める。

近くで妖怪同士が戦っているのだろうか……。

いや、あの叫び声を聞くと、きっと戦いが終わったのだろう。

声が聞こえた方向を振り向くが、何もなかった。

「こんなところで止まってる場合じゃないか……。急ごうと。」

前を向き、また止まっていた足を動かした。

だって、あの妖怪に約束したんだ。

ちゃんと彼に会って、面を向き合って謝るってことを。

周りの音も気にせずに、闇が降りてくる空をかけていった。

「頑張りなさい、あなたのために。」

そういう声さえも、風に流されて聞こえなかった。

しばらくして、人里が見えてきた。

夜の前、ということもあって、市場は賑わっている。

商人たちが客をおびき寄せるために声を張り上げている。

私を知っている商人が、急いでる私に声をかけてきた。

「どうしたんだい、灯ちゃん？」

暢気にそういう声には私は、構っている暇もないので

「ごめん、今構ってられないから！！」　そう返した。

人の波を掻き分けて、走って、走って・・・

なんだか今日は走ってばかりだなあ、と走りながら思った。

でも、どれも仕方がないことだなあとも思ったけど・・・

とりあえず、夢中になって走った。

（悪いことをしてしまったし・・・今日はおいしい料理を作ってあげようかな。）

そんなことを思案していると、なんだか楽しくなってきたし、今まで拗ねていた私がばからしく思えた。

早く、早く家に帰ろう。

私の心は、動く足に反して、ゆったりとしていた。

19：目覚め

今の私がある理由 19：目覚め

その約束は、しっかりと耳に届いた。

「あら？そんなことでいいの？私が自由にできていいじゃない。」

「全部貴女が好き勝手出来るのはしばらくしてからでしょうけどね。」

「そんなの構わないわ。こんな場所とはおさらばよ」

やっとここから出れる、それだけで私は嬉しかった。

こんな場所じゃ力を使わせてもらえないし、私にとって窮屈すぎた。不意に暗闇の中に明かりが灯り、ふっと顔を上げる。

そして、震えた声が響いた。

それは、明らかに、涙で声が震えていたものだった。

「お願いだから…助けてあげて。」

私はその言葉を茶化すことなく、笑顔で答えた。

「私を誰だと思ってるのよ。あなたは私のことを知っているから起こしたんでしょう？」

明るく、そして勇気づけるようにして言ってやった。

「さあ、開けなさい。あなたの願い、そして私の願いを叶える為にね。」

すつと扇子を取り出し、私は言い放った…。

周りはずでに暗くなり、太陽はほぼ沈んでいた。

視界が悪い中、遠くに小さく家が見え、私は辛くても走った。

そうして家が近付いてくるたびに、違和感を感じていった。

ぶっきらぼうに開かれた扉の中からは、彼の声とともに、聞いたこともない声が聞こえてきた。

声からして、若い女性のような、そんな声。

彼の声はどこか切羽詰まっているような、焦っているような声だった。

嫌な予感しかしなかった私は、こっそり家へと入ると、台所の包丁を片手にゆつくりと声のする方へと忍び寄る。

「やめなさい。私を殺したところでどうにもなりやせんだろう。」

「別の女を私に見立てていたんでしよう？ 私は私、あの子はあの子。そう言うのは私嫌いなのに！」

その女性は、人間なんかじゃなく、妖怪だった。

形は人かもしれないが、雰囲気ですぐにわかった。

今にも彼に襲いかかろうとする女性を止めに私は飛び出た。

怖くてたまらないし、今すぐにも逃げ出したかった。

だけど、そんな思考とは裏腹に、足が動き、そして手に持つ包丁を突き出していた。

飛び散る血に私は驚き、思わず開けた口の中に血が飛び込む。

それをぺっと吐くと、急に胸倉を掴まれ、私の足は地を離れた。

「おやおや、向きになりすぎて気付かなかったよ。知らない人には挨拶するのが礼儀だって教わらなかったかい？」

ジタバタ暴れてみても、何の進展もなく、それでももがくしかなかった。

「私の名前を教えてあげる。灯って言うの。あなたと同じよ。」

その瞬間、私は理解した。

この人が亡くなったお嬢さんだったんだと。

理解したと同時に、私の頭の中が振り回されるような感覚に襲われ、頭を押さえ叫ぶ。

「んああああああ！ ああ！ っああああああ！ ！」

私は地面に落され、次に甲高い笑い声が聞こえた。

「はははははは！ ！ ほら見る爺さん！ 私の血を飲んで妖怪になってくガキの姿をな！ ！」

私：妖怪になっちゃったの？

そう自分に問いかけた時だった…

最終話：本当の名前

（ええ、妖怪になるの。さあ、立ちなさい。私に任せればすべて終わるから）

今の私がある理由　最終話：本当の名前

…え？

声が聞こえたと思うと、不快感は消え去っていた。

さっきの声の通り立ったと思えば、地面が割れ、私は落ちて行った。声を上げる暇もなく落とされた…と思ったが、椅子のようなものの上に落ちた。

そこには無数の目があり、どの目も私へ向けられていた。

「汝に問う。汝、妖怪となっても彼を助けたいか？」

目の前の金髪の女性が私に尋ねてくる。

「え、あの…」

「答えなさい。助けたいのか、助けたくないのか。」

助けたい、だって私は謝るためにここまで来たんだから。

「助けたいです…。彼を助けられるんなら…」

すると、彼女はにこつと笑ってみせた。

「汝の願い、しかと聞きつけた。あいつを殺るのは私に任せなさい。」

「

その声を聞いたと同時に、見覚えのある世界が目に入った。

「え…？な…」

驚いた声を上げたのは、女性で、私は心の中で驚いていた。

金色の髪に変わり、体がすごく軽く感じる。

勝手に体が動くのは、きつと金髪の女性が私を動かしているからだろつ。

「あら、あなたが彼の元お嬢さん？育ててもらった恩も忘れて襲い

かかるなんてね…。羨のなっていない子はさようなら、ね。」

扇子を開くと同時に、地面からさっきの無数の目が蠢く空間へと落ちて行った。

（私の仕事は今回はこれで終わり。さあ、あなたのやりたい事をしなさい。）

すると、不意に私が体を動かせるようになり、彼と目が合う。

「ごめんね、陽翠さん。あなたを救いたかったから…私、妖怪になっちゃった。」

苦笑いを浮かべて、私は続けた。

「ごめんなさい。陽翠さんが私のことを思ってたのに、全部陽翠さんが悪いみたいに言っちゃって…」

「いいんだよ、私だって悪かった。ごめんよ。」

その時、彼は灯とは言わなかったのは、私を娘さんとは違うと認めてくれたからだと思った。

「妖怪…嫌いだもんね、陽翠さん。私、もうここから出ていくね。それに、いつ妖怪に完全に飲まれるか分からないもん。」

彼から目をそむけ、私が言くと、不意に彼が私を抱きしめた。

「妖怪でも、お前さんはお前さんだ…。私が育てた、大切な子だ…」

「陽翠さん…ありがとう。」

私は泣くのをこらえ、笑顔で言った。

「それじゃあ…さようなら、陽翠さん。」

「ああ、またね。」

その時私は、彼の方に振り向くことなんて出来なかった。

振り向いてしまったら、涙が止まらなくなりそうだったから…。

ふと、空を見上げてみた。

幾重にも重なる雲の中、ちらりと見える紫と黄金の色が、どこことな私の心に似ているような気がした。

「そうだ、新しい名前を考えないと…」

この日の風景を、この日のことを忘れないように…

「核心たる心は濁った紫色で、それを隠すかのように幾重にも重なる雲」

そうして、その日から私は名乗った。

「私の名前は…八雲紫。」

その後私は、人としての自我を失った…

今の私がある理由 エピローグ

今の私がある理由 エピローグ

博麗神社の境内、たくさんの人妖達が宴を開いている。

もちろん、その中に私も入っているわけだけど…

「そっぴいや萃香は、ずっと一人でいたんだろ？一人るときは何してたんだぜ？」

「何だい藪から棒に。まあ、私は一人で自給自足の生活だったさ。」
そう言つて魔理沙の問いに答え、笑つて見せた

「私は魔理沙の純粹に小さかった頃が知りたいな」

萃香が肘で魔理沙をつつくと、お酒で紅くなつた顔をさらに紅くした。

「ば、そ、そんなのは誰にも教えてやらないぜ！！」

その反応に私もくすつと笑つた。

「あやややや、私は霧雨魔法店にいるから知つてますけどね」。

小さい頃は可愛い女のk」

「文、吹き飛ばされたいか？」

「遠慮しておきますね。」

文は笑つてあしらつた。

しばらくは各々の過去についてで盛り上がつていた。

「ねえ、紫。あなたの過去はどうなのよ？」

盛り上がっている団体の外で、霊夢が私に聞いてきた。

「あら、霊夢もそう言つたの気になるのかしら？」

「紫だから気になるのよ。」

そっぴい霊夢の目は真剣だったため、私は少しばかり戸惑つた。

「ごめんなさいね、霊夢。これだけは秘密にしておきたいから。」

「ふん」。ま、しつこく聞こうとは思つてないし、別にいいわ。」

「霊夢の過去なら教えてあげてもいいわよ？」

「さてと、久々の妖怪退治は精が出るわね。」

「やあねえ、冗談よ、冗談。」

私は笑って霊夢にそう言っていると、そつと月を見上げてみた。雲が幾重にも覆う空… かすかに見える紫と黄金。

私は一度も、あの日のことを忘れることなくてなかった…。

…はいどうも、幻竜です。

え…つと、紫の過去編でしたが、楽しんでいただけたら幸いです、はい。

過去編に出てきた妖怪として意識したのは、幽香と萃香です。

あとは、蟲の王ですね。

昔は蟲の力つてのがすごかったみたいなのでちょっと出してみました。

え…、それにしても最後まで誰が主人公なのかってのを分からせないって言うのは書いていて何か楽しかったですね。

さてと…次回はどうしようかなあ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9723g/>

今の私がある理由

2010年10月10日16時12分発行